地獄の広島を歩いた

田頭和子
本町三丁目

原　爆

私の被爆地は、広島市横川町一丁目の新横川橋のふもとにあった興和ミシン針工場だった。当時、私は安田高等女学校の四年生、十五歳だった。

工場の敷地が電車通りより低かったので、人身の被害が多少軽く、助かった人が多かったのではないかと今考えている。

一九四五（昭和二〇）年八月六日、午前八時から工場前庭で始まった朝礼が終り、各自作業場についた直後のことだった。私は工場の門を入ったところの二階建の事務所と、その隣の建物とのわずかな縦長の空間に、ものすごい閃光を左前方に見た。

「直撃弾！」と感じ作業台の下に伏せた。その時、前夜の呉空襲での学校防火の警備の話をしていた上田孝子さんが、私の目の前で家屋の倒壊をもろに受けて即死した。私は「ドン」という音を聞くでもなく、気がつくと倒壊した材木の下敷きになっていた。

伏せたはずの体は座っている。一、二秒茫然としていると、あっちこっちで「先生助けて」「部長さん助けて」「お母さん」と叫ぶ声がしてきた。私はその声を聞きながら、なぜか「先生は年配なのでだめだ」「部長さんはなじみが薄い」「母は遠い」などと頭の中で考えた。右頬に水が流れる感じがしたので、右手で撫でると血がついていた。誰かけがをした人が私の上にでもいるのだと考え、私自身がけがをしているとは思ってもいなかった。上を見るとわずかな明かりが見えた。両手で材木をどかすと空間ができた。

「しめた」と思ったと同時に、「先生助けて！」と言う鮎川さんの声がした。同じ寄宿生である。「鮎川さん、元気出して。私は外に出られそうじゃけ、今見てあげる。」と言って私は材木をわけて上によじ登った。鮎川さんは私の近くにいなかったはずだ。「ピカ」を見て逃げるように走ってきたのだろう。私は鮎川さんの頭のまわりから材木を取り除き、上半身が見えるようにして、「そこまで木をどかしたら自分で出られるけ、出てきんさい」と言うと、疲れを感じたので庭に降りていった。その後ず

いぶん彼女を気にしていたが、彼女は自力で脱出したと言う。

庭には、看護の先生と三、四人の先輩が恐怖で茫然として立っていた。先生は私を見て、「あんた、大変じゃけ。〇〇外科へ行きなさい」と言われ、私は自分がけがをしていることを知った。私はその時は、工場だけが直撃弾を受けたと思っていたが、門を一歩出て驚いた。広島市は見える限り家屋が倒壊して土煙りがもうもうと立っているではないか。その中を外科の院長先生が若い二人の医師に支えられて逃げて来られた。「先生、だめです。院長先生、大けがをしています」と言いながら、私は初めて空襲の被害の大きさを知ったのだ。その時は十人余りの軽傷者が集まり、お互いに無事を喜んでいた。

私は避難しなければと思い、電車道路に出た。広い道路には、裸でわめきながら走る人や、土埃をかぶり、頭髪が乱れ、夏の薄物の服が破れた姿の人達が三三五五に出てきた。浄謙さんが「三ちゃん(私の愛称)、こっちよ。古市へ逃げるんじゃけんね」と叫んでいる声を聞いたが、私は白嶋東中町の寄宿舎に帰りたいと思い横川橋の方に一人向かった。

しかし、横川橋から白嶋へ帰る道まで行くと、鯉城の先には三カ所ぐらいから煙りが上がっていたので、「だめだ」と言い引き返した。みんなを追ったが、もう姿は見えない。意を決して川を泳いで渡り山の方に逃げようと考え、広瀬北町の川辺に立った。川幅いっぱいに水はあったが、引き潮時で川岸は浅瀬になっており、近所の人々も逃げてきて、右往左往していた。私は山際に行きたいと思い、水の中に入り泳ぎ出した。やっと対岸に着いたが、上から歩哨の兵士が「学生さん、悪いけど、ここは軍の倉庫がある所じゃけ、上に上げてあげられんのじゃ。」と本当に気の毒そうに言った。その声は忘れられない。

なるほど、岸には鉄条網が張りめぐらされていた。私は仕方なく振り向くと、後に続いて三、四人の人が泳いで来ていた。対岸の家は壊れ発火し、けが人が多いのに鉄条網の中の倉庫はびくともしていない。さすが兵器廠の建物だ。しかし、対岸は地獄絵そのものだった。その後、兵士はだいじょうぶだったのかと時々思い出している。

火に追われて逃げてきた人々で川辺はいっぱいになっていた。この川辺で級友の児玉さん、大歳さんと出会った。児玉さんは無傷で元気だった。大歳さんは皮を縫う長さ五、六センチの太い針が右頬の真ん中に突き刺さり、ぶらさがっていたが元気だった。

段々と水も引き、川岸の砂地が出て、負傷者や元気な者でいっぱいになった。三人は水引き際に座り込んだ。火災が岸辺まで近づいていたのか、火の粉が飛んでくる。熱風で背中が熱くなり困っていた時、横川の方から板戸が流れてきた。

私はその板戸を元気な児玉さんに拾ってもらい、背後に立て熱を避けた。しばらくして、また一枚流れてきたので、今度は

頭の上に乗せ、板の両端を元気な人が支えた。「黒い雨」が降り出したのはそれからのことで助かった。私たちは川の中に板戸で小屋を作り山際の方に向かっていたので、火焔地獄は見えなかった。

三十代のおばさんが、「学生さん、仲間に入れて」と来た。おばさんは紙屋町方面で被爆したが、無傷で助かったことを語り、喜んでいたが、座っていられなくなり、私の膝を枕に横になった。おばさんは「おかしい。爆弾の跡もないのに広島全部がやられた。私も段々と体の力がぬけていくようじゃけ。毒ガスも入っとったんかね」と言った。その後、嘔吐が始まり、その都度衰弱していった。

私も時折睡魔に襲われたが、大歳さんに「寝ちゃいけん。起きときんさい」と体を揺すられた。「黒い雨」の時、児玉さんは流言飛語を聞いてきて、血相を変えていった。「大変よ、敵機が油をまいて大きな焼夷弾を落としよるんと言うんよ」。私は「ちょっと見て、ほら、油をまくというけど、水に油は浮いとらんけえね。大きな焼夷弾というけど、あれは太陽よ。日食の時、曇りガラスを使うじゃろう、煙りが曇りガラスのかわりじゃけね。ちがうよ」と言い、児玉さんも落ち着いた。

午後三時頃、「学徒はおらんか」という工場の部長の呼ぶ声に気づき、無事を知らせる義務を感じて、部長のところに行くことにした。しかし、一緒にいるおばさんはどうしょうとみんなで相談し、岸のところまで板戸を運び、おばさんをその中で休ませることにした。しかし、両方から体を支えないと歩けないほど衰弱はすすんでいた。無傷を喜んでいた人だったが、三、四日のうちに亡くなったのかも知れない。

部長宅は倒壊していたが火災は免れ、医薬品、食品などを引き出し、大歳さん、児玉さんが持った。私は寒気を訴えたので、部長さんは白いカーテンをはずし、私の体をすっぽり包んでくれた。その中に油の一升ビンをかかえて出た。

避　難

川から電車通りに出た。あの「黒い雨」で火災はおさまり、広島全市が見渡せた。道路のアスファルトは余熱でやわらかく、素足にベトベトとくっつき熱かった。横川より奥に逃げたのか、川に降りたかしたのだろう、四、五メートル歩くと、新横川橋の半ばほどに馬が横倒しになり、馬の腹を枕に男の人が仰向きに寝ていた。近づくと男の人は無傷できれいな姿で死んでいた。荷馬車の親方とその馬だろう。家屋疎開にいったのか、安らかな姿が絵のように頭に残った。

橋から横川駅に向かい、十メートルほど歩くと、レールの上に全身裸の焦げ茶色の人が立っていた。顔は腫れ、表情も顔立ちもわからない。私は足を止めて、「ア！　死んでいるのに、立っている」とつぶやくと、かすかに私の方に顔が動いた。

何と言ってあげればよいのか。私は立ちすくんだ。でもその

足元に、もう一つの焦げ茶色の硬直した死体があった。踵の肉はなく、白骨が見える。なぜか二人は釣りに行っていた少年だという印象があった。かわいそうに、と心から思った。先に行く友が「早く来んさい」と呼ぶ。思いを残して立ち去った。

横川駅の近辺は人びとが右往左往していた。駅前の焼け残ったビルの前に森本さんが立っていた。声をかけると「私も連れて行って」と言った。

彼女の首は前面が大きく切れ、パックリ開いて、中身が出ていた。でも、声は出た。彼女の家は己斐なので汽車で一駅だ。便があれば家に帰ることができると思い、「あんた、ここの救護所で手当して、便があったら己斐へ帰りんさい」と言った。後年、彼女に聞くと、部長さんの配慮で、一級先輩の元気な人がリヤカーで迎えに来て、古市の東亜麻工に運ばれ、手当を受け、連絡を受けたお母さんは国道を歩いて、己斐から途中リヤカーを借りて迎えに来たという。

横川駅から古市に向かう道路は、しばらく行くと舗装されていなかった。午後だいぶ過ぎていたが、まだ暑い日差しが残り、その中を土埃をあげながら罹災者が連綿と続いていた。

兵隊も民間人の区別もなく、負傷者も無傷の人も、血や埃がついた衣服が雨にぬれ、汚れ破れた姿で、ただもくもくと無表情で足を運んでいた。

大八車やリヤカーが忙しく通っていく。その中から話し声が聞こえた。同郷の兵隊だろうか。故郷の食べ物、祭りの話、「元気に帰れば○○へ行こう」など懸命に語りながら、一人がもう一人の肩を支えて、とぼとぼ歩いていく。しかし相手は一言も言わなかった。本当に重体らしい。この友情に涙するほど、話しかける人の心情が伝わってきた。忘れられない光景となった。

しばらく行くと空襲警報が鳴り、人びとは恐怖に震えながら、近くの竹やぶへ一目散に駆け込んだ。二人の兵士はそこまでは見たが、その後どうされたのかは解らない。

東亜麻工の寮に着いたのは夕方近くで、先に避難した浄謙さんをはじめ、二十人ちかい級友が無事を喜んで迎えてくれた。広い畳の部屋に横になり、ほっとする。夕食に大豆入りのお握りをもらった。朝食以来何もお腹に入れていなかった。おいしくいただき嬉しかった。食糧難の時代に大豆入りのお握りは御馳走である。

地獄の一日が明けた。

若い工員が部屋に来て「どうも新型爆弾らしく、市街どこにも穴がない。おかしい」と被害状況を話してくれた。

一級先輩の両親が来られた。その先輩は亡くなっていた。先生と友達の話を聞き、泣き崩れる母親、唖然と聞く父親。「あの朝、あの子は一番好きな桜の模様の下着を着て出ましたけね」と母親は独り言を言った。この時代、衣料品といえば品がなく、容易に買うこともできず、手製の代用品を作って着せたもので

ある。

二日目の夕方、吉田先生が来られた。若く明るい先生は人気一番で、生徒は顔を見ただけで元気づいた。早速傷の手当を始めた先生は、私に隣の救護所に行くように言われた。救護所になった講堂の入口に立つと、足の踏み込む所もないほど満員であった。真夏の一夜が明けた講堂は、血のり、または火傷で肌がただれて、血膿と汗の臭いで悪臭を放っていた。悪いけど、とてもその場にいたたまれず引き返した。

暮れゆく講堂にうづくまっている人びとの様子は、阿鼻叫喚の地獄に見えた。罪のない庶民の苦しみを見る時、長い戦争に疲れ、哀れで、早く戦争は終わればよいと思った。「先生、私なんか軽い傷よ。先生でいいけー。お願いします」と、先生に赤チンキで傷を消毒してもらい、三角布で頬かむりしてもらった。左頬に数か所の傷などがあったが、その時は気にもしなかった。

夕方仲良しの入沢さんが加わった。お互いの無事を喜ぶ。被爆時は、私の隣に座っていた彼女は、瞬時の間に別の場所に動いたらしい。彼女の家に荷物を預けてあるので、彼女の家に一緒に行くことになった。

終　戦

彼女の一家は流川から可部の奥にある険しい山の渓谷の村に疎開していた。可部に向かう汽車の中は真夏の暑さに加え、罹災者で満員だった。私たち二人は立ったままで、身動きもままならない。

目の前の座席に二歳くらいのかわいい幼女がいた。母親の膝に甘えてよりかかり、おねだりしているが、色白の無傷の母親は爆心地近くで被爆したのか、憔悴しきった様子で、手を動かすのもおっくうそうであった。立っている子供も疲れるのかよく動く。かわいそうになって、声をかけて相手をした。罪のない弱者、まして幼い子と母親が戦禍をくぐるのは、どこの国であれ哀れでならないと、この時、痛切に感じたものである。

お昼すぎ頃、汽車は時間遅れで可部に着いた。ジリジリと太陽が容赦なく照りつけるホームは、身動き出来ないほどの罹災者で埋め尽くされた。入沢さんから離れないように気遣う私の耳に「三本竹のお姉さん」と呼ぶ声がした。一メートルぐらい前に寄宿生の一年生が手を振っていた。六日の朝、家屋疎開の作業に行ったはずである。彼女は「無事だったんです。けがもしないです。」と言い、私が近づくと、「恐ろしかったんですよ。大変だったんです。先生や皆は一緒に逃げて、途中ではぐれたんです」と泣き出した。

後日、家屋疎開の生徒たちは全滅であったことを聞いた。友達は、火焔地獄の中を逃げ惑い、防火水槽の中に折り重なるようにして、新屋先生は生徒をかばう姿で亡くなった。二二歳で女専を切り上げ卒業し、東京から帰って間もない先生は、学校名を人に告げながら最期を迎えたという。

彼女は運よく可部からバスで家に帰ったが、戦後、学校の死亡名簿に名前が載っていた。今、顔は思い出せるが、名前は忘れた。先頃五〇年慰霊祭で彼女に詫びた。私は彼女のことを今一度調べたいと思っている。

汽車は渓谷の渓流に沿ってガタガタと走り、無人駅のような駅から、険しい登り坂を少し行くと、入沢宅の疎開先に着いた。皆が飛び出し、入沢さんのお母さんは涙を流して喜び迎えた。早速、焼酎で傷の消毒をしてやっと落ち着いたのである。

農家の家を二所帯で借りて、彼女の所は三部屋くらいあったのか、私たちは中二階の晴れ晴れとした部屋で休ませてもらった。先客のお茶の先生という中年女性も怪我をしていた。その女性は幟町方面から逃げてきて疲れている様子であった。

二、三日すると村の家々で、家の人、避難してきた縁者の訃報を聞くようになった。

入沢さんのお母さんは、自家製のお豆腐を作り、川魚を手に入れ、芋類を買ってあるからと食事に気を配って下さった。ありがたいことだった。お茶の先生は、一日ごとに弱気になって、お盆の灯籠流しにいきたいと私を誘った。私くらいの娘を亡くした話や、先ゆく不安を話しながら、やっと渓流まで降りて、流れの早い水面に灯籠を流した。

ズドン、ズドンという岩国の空襲が伝わり、地響きを感じ、山奥深い住人は、また広島かと案じた。

十五日のラジオ放送で、天皇陛下の玉音放送を拝聴して、お父さんが「どうも日本は負けたらしい」と言われた。

私の体調はやや落ち着いたので十六日に帰ることにした。お茶の先生も、己斐の知人に荷物を疎開してあるので見に行きたいと同行することになり、朝早くお握りをもらって、厚くお礼を述べて出発した。

横川駅付近はあらかた片付いていたが、所々煙りが上がるのが見えた。お茶の先生と左右に分かれ、満員の汽車に乗り、時間遅れで尾道に着いた。尾道は商業都市なので戦災は受けなかった。尾道の人たちは終戦の報をどう受け取ったのか。三角布の頬かむりの罹災者は、場違いのように感じられ寂しく思った。

原爆投下から四日目頃、尾道の祖父と伯父は私を探しに広島に向かった。祖父はあまりに悲惨な状態と、照りつける暑さに気持ちが悪くなり、また、私が無事に友達の家に逃げたことを聞き、尾道に帰った。その後体調を悪くして、一ケ月ほど気力をなくした。伯父は、芸備銀行（現在の広島銀行）本店の様子を見に行き四人の遺体を掘り出した。

九月一日、父方の伯母が慌ただしく訪ねてきて「和ちゃんは元気か」と言った。その後は涙声で、「（従兄の）清美は死んだ」と言った。二ケ月前に将校になって、二部隊に赴任していた従兄は被爆後、死体などの片付けをして四日目頃、休暇が出て帰郷して元気だと親戚をまわったが、律義な伯父は休暇を早めに

切り上げさせ従兄を帰した。

その後、従兄は原爆症になり、「苦しいから看病に来てほしい」と手紙を出したが、その手紙と死亡通知が一緒に伯母の所に届いたというのだ。

今一人の従兄は、東京大学で原子電子の勉強を専攻していたが、「核は絶対に兵器に使ってはいけない」と随筆に書いていた。一九四一（昭和十六）年、二十六歳という若さで死んだが、原爆を知らないでよかった、と後年私は思った。